

1982.5.30

治教育のよろづものではなく、朝鮮人の子供に民族的
素養を植えつけることである点を強調している。
講演録ということで、質疑応答も交えられており
そこにはセミナー参加者の質問に答えて、当時海防
といふ教科書について、また解放後の民族学校草創
期の苦労話等について語っている。

「4・24教育廻争」太阪の梁永厚氏は、現在、
兵庫県立尼崎工業高校という公立高校で朝鮮語を教え
られている教員なり先生の一人である。氏は、一九五
一年四月から神戸市長田区にあつた朝鮮中、高等学校
で教師生活を始めたが、「当時は日韓の兵庫県立農芸会
の本部も（学校と）一緒にいた。学校の二階へ行くと、
極左昌原主義的な廻争が行なわれていた時期でした。の
で、手堅に持つて警官なんかとやり合える武器めりた
ものが置いてあるという物騒な時期」であったという。
約二十年間、民族学校の教壇に立ち、その後、「国体の
本部から中央へ引っ越し移転の、めし」と喰いまし
た」という。

氏は「在日朝鮮人史研究会」「大阪における4・
24教育廻争の覚え書き」「太阪」「太阪における
朝鮮人学校建設運動」（著者）を著表している。
講演については前後二年間わたる廻りと肺づけている。

「日本の教師の役割は、朝鮮の子供を朝鮮学校の門
の前に連れていくことである」ということが、現在は
おいては否定されているということを前提にして、氏
は、「国家と在外国民」という帰属関係とはつきりさせ
なければならないと思います。民族教育、あるいは国家
が海外に住んでいる国民に考慮している点の中に入る
のが、一番正常な形としてあると考え、日朝両側の教育
（教育者）の連帯においては、現状固定的に考えることな
く、展望をもつていくことを訴えている。

「五日、朝鮮人民族教育の現状」の梁永厚氏は、二つ
の点がうなぎを語っている。一つは氏が中島智子氏と
ともに行なった「日本の学校に子供を通わせている在
日朝鮮人父母の教育親に問うる調査」と材料として
調査結果は「在日朝鮮人史研究会」「太阪」「太阪」を表さ
れており、「もう一つは、氏が民族学校の現状（東大
阪朝鮮第三初級学校）についての体験から、民族教育の現状と立場的に語りたい」としてそれはまた、
日本の学校の、単に朝鮮人の子供に対する教育の問題
だけではない。教育そのものの内題点とも指摘して
いる。

広く読まれることを望みたい。（飛田雄一）

（A5版 92頁。定価600円（テニロ印））

1982.5.30

むくげ通信72号 (13)

評

・4・24教育廻争　—　神戸　　金慶海
　　4・24教育廻争　—　太阪　　梁永厚

本書は、一九七二年より続けられている朝鮮中の三
ナートの（十六期（81年4月～6月））の講演録である。
講師の三氏は、いずれも在日朝鮮人の民族教育にかか
わってこられた方々で、自分の経験の上につて、民族
教育の歴史および現状について、内容豊かに語られ
ている。講演録ということであり、平易で、入門書と
しても適したものになつてゐる。

在日朝鮮人の民族教育を語る場合、どうしても船
れなければならないのが、GHの占領下の（一九四八年
四月）、神戸・大阪を中心として民族教育をするため
に廻された「4・24防神教育廻争」である。それは、
例えば、神戸において当时発布された非常事態宣言が、
GHの占領下に発布された唯一のものであつたという
ことからもわかるように、大きな規模で廻されたもの
である。解放（敗戦）前の日本において、名を奪われ
たとしても言えるのである。

「4・24教育廻争　—　神戸　　金慶海氏は、即ち在日
朝鮮人民族教育の原点（4・24教育教育廻争の記録）
（田畠書店）を書かれた方で、氏自身も廻争の時（1948年）
民族学校の生徒として参加され、経験をもつてゐる。
氏は当時の体験者の話を聞いて、まわり、文献と集
めたりして、当時の廻いびもようを彷彿とさせるよう
に、より自由に語つてゐる。氏は廻いの教訓として、
①民族の権利は互いに尊重されなければならないこと、
②教育廻争が現在の民族教育の原点となつてゐること、
③大勢こそが廻つたということ、④朝鮮人と日本人との
友好、連帯が必要であることを述べてゐる。中でも
印象深いのは②で、このことは講演全体の基調ともな
っているが、民族教育にとつて一番大切なことは、政
府の政策を尊重することである。